谷川連峰

万太郎谷•大ベタテ沢右俣

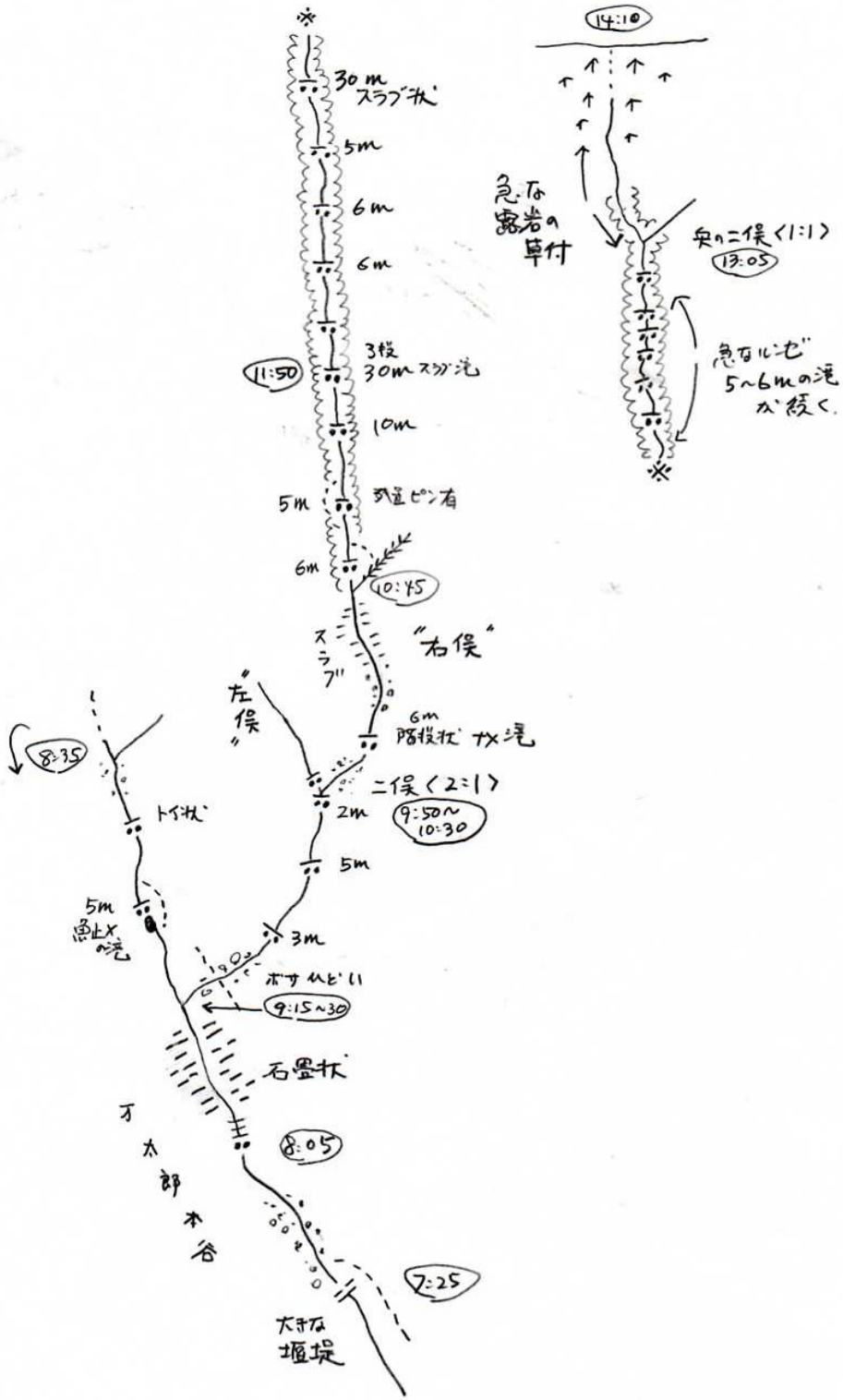
遡行日:09 年 10 月 4 日
メンバー:三井(L、記録)、金井、志満

雨に挟まれた晴れの一日、シーズン終盤の沢をのんびり楽しもうと、金井さんの希望もあって今回の沢が決まる。
しかし、うっかりして出合いをミスるヘマをやらかした。まー、それはそれで笑い話、思い出の一つにはなるのだが…。

前夜は久し振りに土樽駅でステビしようと思ったのだが、駅の待合室には既に登山者が数人寝ていたので、駅舎前に持参のテントを張って仮泊する。しかし、駅舎のすぐ前を関越道が通っていて、その騒音で熟睡という訳にはいかなかった。
翌朝、朝食、沢支度等を済ませて万太郎谷の出合いに車を走らせる。
ゲート前の駐車地に車を止めると林道を歩き、2 年前に完成した巨大堰堤を越えた所から万太郎谷に入る。
小広い河原を暫く歩くとナメ滝が現れ、その先は両岸が石畳状の沢床となり渓谷美を味わえるところだ。すぐ先で小沢と出合うがまだ「大ベタテ沢」の出合ではないだろうとパス。
間もなく 5m ほどの釜を持った滝(魚止めの滝)と出合う。その左岸にはトラロープがたれていて明瞭な巻き道がついている。さらに進むと左岸に冴えない小沢がある。「ここか。」
メンバーに声を掛けるが GPS でチェックしていた志満さんが「来すぎている。」という。言われて地形図と照合してみるとすぐ先には関越道の排気塔が立っていて確かに来すぎているようだ。
左岸を探りながら引き返して行くが魚止めの滝の上にあるハズの出合が見当たらない。
さらに下って行くと最初に見過ごした小沢まで戻ってしまった。該当する沢はここしかない。志満さんの GPS も合っているという。
ここから仕切り直し。しかし、貧弱なボサ沢で「本当にこんなで面白い沢になるのだろうか。」
暫く我慢していくと幾分沢らしくなり間もなく、二俣となる。我々は右俣なので当然右だ。が、右に進むが、すぐに行き止ってしまうような小沢で足が止まる。
それに持参の遡行図では二俣の直下は 8m3 段滝となっているがそんなものはなく、2m の小滝があるだけだ。
またまた GPS やら地形図やらを動員して調べるがやはりここで間違いはない様だが…。
確信しきれないままボサを漕ぎながら沢を進むと急なスラブのルンゼ状となる。
すぐ上に 6m ほどの直瀑が現れるがこの滝には見覚えがある。沢をネット検索していた時に見た気がする。確か 5 段 40m と称されている滝の一段目だろう。
左岸側のルンゼから巻いて登り、2段目の直瀑は1本残置ピンがあったので登ろうとしたが梃子摺るので諦め左岸を巻く。沢はスラブのルンゼといったらいいだろうか。急な階段状で 5•6m 位の滝が次々に出てくる。
滝はそんなに難しいわけではないが水流のあるところはヌメっていて油断はならない。
細い滝の両岸の笹や潅木が格好の手懸りとなって身体を引き揚げて行く。
30m のスラブ滝は下部はフリクション頼りの登攀となり、上部は傾斜が強まるので右岸の草を強引に掴んで登る事となる。ここは落ち口にしっかりしたアンカーをとって何処まで登れるかやってみたら面白そうだ。
奥の二俣を左にとって登る。露岩と草付が混じっているような感じで、傾斜があるので慎重さは必要だ。
沢形がなくなると僅かな藪漕ぎがあって吾策新道にでて終了。

山は僅かに色づき始めていてナナカマドの実は既に真っ赤になっている。全山が紅葉するのももう直だろう。
今年の沢も直に終わるのか。
後は吾策新道をのんびりと1時間も下れば車のところに戻れる手軽さがいい。

*事前に入手した情報に逆に惑わされてしまった。沢の基本は地形図と磁石と高度計を的確に有効に使って判断し行動する事。これを蔑ろにすると今回のような事になる。猛省。
*沢そのものは初級の沢といわれていて流程も短いが結構楽しめる。天気の芳しくない時の代替の沢として頭の隅に入れておいてもいいかもしれない。



09年 10月 4日
上越谷川岳 丁太郎谷・大ベクテ沢右俣